

姚雪垠「李自成」の構造

深 澤 一 幸

一

「朝日ジャーナル」一九七八年五月十二日掲載の「父と娘の中國紀行」で、シナリオライターの高山由紀子さんはこう書いている。

《「紅樓夢」をととても面白い小説と言った通譯の李素梅さんに、中國の若い人の間では、どんな小説が流行しているのかときいてみました。李さんは、中國國際旅行總社に所屬する二七歳の女性です。「青春之歌」と「李自成」という答えが返ってきました。

.....

私は「百花齊放、百家爭鳴」と大書された新華書店のショーウィンドーに目をとめました。「李自成」という表題を見たからです。立ち停まってみると、「史記」、「國語」、「孫子」等の表紙も見え、李賀の詩選まであります。私は「李自成」という本を買ってみたくなって書店に入りました。

中は非常に廣く、一階と二階に分かれ、各々の分野に分類されて表示されています。書店の一隅が圖書館のようになっていて貸し出しているようでした。日本の本屋に比べれば、何分の一、何十分の一の書籍しか置いてありませんが、中は

大勢の若者たちで混雑し、特に文學を扱う賣り場には多くの人々がひしめいていました。人々の閒をぬって、李自成とメモした紙を中年の女店員の前に出しましたが、彼女は、ちょっと私を見て笑い首を横に振るばかりです。賣り切れているということのようでした。……」

高山さんが手に入れそこねた小説こそ、私がこれから論じようとする姚雪垠のライフワーク「李自成」にほかならぬ。この小説の反響の大きさは、高山さんの一文からもうかがえるが、ここで中國側の報道も紹介しておこう。「光明日報」一九七七年十一月二十七日にのせられた「黨が私にくれた藝術の新生命だ」——作家姚雪垠を訪ねて」は、次のように傳える。

《この長編歴史小説は讀者のきわめて熱烈な反響をひきおこした。新華書店がこの小説を賣り出したとき、いつでもこのような盛況があらわれた——消息が傳わると、本をかう人たちはすぐさま長蛇の列をつくった。初版三十萬部はたちまち争い買われて賣り切れた。大量の讀者の願いを満足させるために、現在すでに天津、上海、廣西、青海、吉林、四川など十八の省市自治區の出版社が、中國青年出版社に紙型をもとめ、印刷の準備をしている。工場、農村、學校、駐屯所で、たくさんの人が争って讀みあい、興味津津にかたりあい、ある人などはわずらわしいのも厭わず、大切に一冊をかきうつしたほどである。一部の小説がこのように熱烈な歡迎を受けるのは、四人組が文壇を獨占していた時には、みるすべのなかつたことである。》

李自成は、明朝末年におこった農民蜂起の首領である。明の萬曆三十四年（一六〇六）、陝西省米脂縣の農民の子として生まれ、銀川驛で馬夫をしたのち、闖王高迎祥の農民軍に参加し、その死後にはかれ自らが闖王となった。陝西・河南での戦闘をへて、ついに明王朝を打倒し大順國をうちたてたが、清に寢返った吳三桂と清軍の追撃をうけて北京を放棄し、湖北の九宮山で土豪の不意打ちをうけ、みじめな最後をとげた。三十九歳だった。小説は、この李自成ひきいる農民軍を中心にして、それと對立したり同盟したりする中間的な張獻忠、李・張の流賊と徹底的に對立する崇禎帝中心の明王朝、この三者の背後に重くひかえる清朝をからませたものであり、最後には全五卷となるはずだが、まだ二卷しか刊行されていない。一九六三年七月

に、第一巻、上下二分冊、總ページ未詳、が中國青年出版社から刊行され、一九七六年十二月になって、第二巻、上中下三分冊、總一三八〇ページが刊行され、おかれて一九七七年七月に、六三年の初版に「前言」と最後の一章を加えいささか補訂した第一巻修訂再版、總八三四ページ、が刊行された。以下、第一巻の叙述は、すべてこの修訂再版による。

二巻分だけでもかなり厩大なこの小説のあらすじを、後に述べる宮廷部分は省いて、主に李自成の動きから述べると、第一巻では、明の崇禎十一年（一六三八）冬から翌十二年夏までをえがく。十一年冬、李自成は陝西の潼關南原において明軍に包圍され、壯絶な戦闘ののち包圍を突破したものの、残ったのは十八人、妻の高桂英とは生き別れになってしまった。しかしかれはただちに商洛山中において軍隊の立てなおしをはかり、そのころ一時的に明王朝に歸順していた穀城の張獻忠のもとへ、單身で交渉にいったりした。さらには河南西部の嶠函山中に逃げひそんでいた高桂英たちも商洛山中にもどってきた。交渉がきいたのか、張獻忠は再び明王朝にそむき、歴史はまた動きだす。

第二巻は、崇禎十二年（一六三九）夏から翌十三年夏までをえがく。十二年夏、商洛山中では疫病が流行し、李自成と六七割の將兵たちが病氣にかかった。明軍はこの機をのがさず數路から進攻し、同時に李自成軍の内部にはたらきかけて反亂させ、状況はきわめて險惡となった。李自成は自から石門谷におもむいて反亂を鎮壓し、また劉宗敏、高桂英などもおちついた對應をしたので、明軍も攻めきれず、掃蕩計畫は失敗した。その翌年夏のはじめ、李自成は千人あまりの兵をひきいて武關から包圍を突破すると、張獻忠のもとに身をよせようとしたが拒絶され、湖北の鄖陽山中に潜伏する。冬、かれは時機をみきわめると、突然河南に入り、各地の飢民たちがつきしたがって軍は大幅にふくれあがった。そこで李岩・紅娘子などの参加をえて、軍は北上し、洛陽を破り福王を殺すと、さらに東のかた開封にむかった。

さらに、第三巻の一部は、雑誌などに發表されている。「人民文學」一九七八年第六期には、「李自成」第三巻の一單元」と副題する「燕遼紀事」がのせられ、清の順治帝の父皇太極とかれの愛妃永福宮莊妃のこと、明と清の松山での戦闘とそれにづく明將洪承疇の意外な清への降伏がえがかれている。また「上海文藝」創刊號にも、高夫人を中心とした第三巻の一單元

が掲載されているようだが、まだ目睹しえない。

二

作者姚雪垠によれば、かれが「李自成」をかくのは、「黨の文學事業のためわずかの力でも餘分に出し、プロレタリア階級獨裁の利益のため歴史的題材とこの文學陣地を占領し、五四新文學運動以來の歴史長篇小説の空白を埋めるため」（第一卷・前言）だという。歴史小説とは、歴史と小説、いいかえれば事實の部分とフィクションの部分の部分がせめぎあい、融合しあう、その機微が作品の價值を決めるジャンルだが、それについて、姚はいう、

《歴史小説は歴史科學と小説藝術の有機的結合であるべきであり、そして歴史小説家は兩者の關係を處理するときかならず歴史に深く入り、歴史から跳び出すというところまでやらねばならない。歴史に深く入らなければ歴史科學に到達できず、歴史から跳び出さなければ藝術の使命を完成することはできない。深入と跳出の關係のうえで、深入は前提であり、基礎である。歴史に深入するところまでやらなければ、歴史から跳出することは語れない。相當正確に歴史運動の規律、歴史事變や當時の生活の各方面を認識できなければ、藝術的構想をすすめ、歴史生活を再現し、歴史運動の基本規律や重大問題の眞の意義を反映することができないし、またちがった歴史上の人物に對してかれらの典型環境中の典型性格を表現することもできない。》（第一卷・前言）

ここでかれのいう「歴史への深入」は、まず歴史のなかにあらわれた事實を深く追求することであり、その段階をへたのちに、「歴史からの跳出」、つまりフィクションの世界にすすめるというのだが、この發言全體における作者の重心は、「歴史への深入」に大きく傾いている。それはかれ自身「歴史科學」といつているように、いったんは中國に充滿するイデオロギー的な視點を排除し、自然科學者のような冷靜さでもって歴史を検討することである。この小説が、作者自身からも歴史小説と規

定され、他の小説と明らかに異なるのは、なによりもまず明末の歴史にたいする全體的科學的な「深入」の態度、事實重視の視點によつてである。それは、すでに第一卷の冒頭からうかがわれる。

《崇禎十一年十月三日の夜、ほぼ一更のころおい、北京のまちはすでに静まりかえり、常ならぬ不氣味さとわびしさをあらわしていた。主要な通りの入口にはすべて兵士がたち、たまたまやつてきた通行人を検査していた。家家の表門にはすべて紅のや白の紙ちようちんがかけられ、燈光うすぐらく、のきしたでゆれている。かすかな燈光のもとで、各通りの入口の扉に大判の、木版で印刷した戒嚴令布告が貼つてあるのがみえる。せまくて長い通りや横丁では、つねに夜まわりが小さなちようちんをさげ、破れ銅か拍子木をたたき、寒さにちんだ影がしばしあらわれると、またくらやみのなかに消えてゆくのである。そのゆるやかな、元氣のないどらの音か拍子木の音も風の音のなかでだんだん遠くなってゆく。》（第一卷・第一章）

この重い、大作の冒頭にふさわしい敘述は、明代の歴史のなかの時間、空間を充分につたえている。「歴史への深入」の成果が、明らかにみられる。

さらに例をあげれば、繁華きわまる開封の相國寺で、のちに李自成の參謀となる宋獻策が拳法家の膏藥賣りに身をやつした李の部下劉體純と出あうところで、相國寺の境内のにぎやかなさまをのべていう。

《二門のなかは、見物人がいっぱい、各種の小商あきないをするもの、易者手相見、ニセ藥を賣るもの、講釋師のほかに、石道の兩がわにはまだ地に坐して金をねだるめくら、びっこ、かわらで身體をうつこじき、刀で身體をうつこじきがいる。これらの人はこじきの職では坐りの一門に屬し、いつもここで地に坐してねだる。およそ街まわり一門に屬する各種のこじきはすべて山門以内に入るを許さず、違犯者はかれらが棍棒でめったうちして追いだし、龍頭（こじきの頭目）にわたしてこらしめさす。……》（第二卷・第十六章）

「かわらで身體をうつこじき」と譯したのは、原文では「打磚的」、「刀で身體をうつこじき」は、原文では「排刀的」、「坐

り」と譯したのは、原文では「坐氣」であり、いずれも作者による丁寧な注がついている。「坐氣」の注を例としてあげれば、
《職業》「こじきは坐りと街まわりとの二種類に大きくわけられる。きまった場所にすわって動かず、お布施をもとめるのを、坐りという。》

本文そのものにもみられる歴史深入、事實重視の態度は、この自注をつけるという行爲によって、よりいっそう明らかなものとなる。ここでは姚は明らかに小説家というよりむしろ歴史家である。このような志向は、他の面からもうかがえる。たとえば、潼關南原の戦いをまえにして、李自成が土地のもの杜宗文に道案内をたずねるくだり、

《道案内は。》闖王はまたたずねた。

杜宗文じいさんはすぐさま答えていった、「道案内するものもちやんとさがしました、闖王、さっきわたしとあなたにあいにきたせむしの狗娃ですよ。あいつは潼關のいなかで三年こじきをしたことがあり、山も谷も、村も部落も、すみずみまでしっております。》（第一卷・第六章）

ここで「道案内するもの」と譯した「帶條子的」に、姚は注している、「土匪の隠語。みちを條子といい、道案内を帶條子的という。」。また「せむし」と譯した「背鍋」に姚は注している、「土語ではせむしを背鍋という。」。これら、方言、隠語の駆使は、この小説の隨所にみられるが、これも實際の李自成たちが、どのような言語を使ったのかという歴史的事實への追求にもとづくものである。

このような、實に周到な歴史深入の結果として、この小説は從來の歴史小説、たとえば「三國演義」などにみられない印象をあたえる。まず感ぜられるのは、線的な敘述スタイルから面的な敘述スタイルへの發展である。ここで線というのは、歴史上における事件を點とすると、「三國演義」などは、その點をつないでいって線にしたような敘述スタイルをとっているということである。それは、登場人物が歴史上ではたす役割だけをえがいて、それ以外の面をすべて切り捨てるところからくる。つまり、歴史的人間ではあっても、生活する人間ではないわけである。しかし「李自成」はそうでない。歴史科學による歴史

深入の結果、作者は人物を生活レベルまでえがかなければならなかったのだろう。それは、小説自體からの要請だった。さきに譯出したいくつかの敘述からも、そのことはうかがえる。そして、このような敘述は、「三國演義」など従来の歴史小説には全くみられない。生活レベルまでおりた面的な敘述こそ、歴史小説「李自成」第一の特徴といえよう。

しかし、この面的敘述スタイルには、實は先蹤がある。歴史小説以外の分野でならば、それは普遍的とさえいえるだろう。生活そのものを小説として中心におくスタイルは、明の「金瓶梅」にはじまり、「紅樓夢」において確立しているのだ。姚の「李自成」の生活レベルにおけるひろがりに、これらの小説が影響を與えぬはずがない。そして姚自身、一九七五年五月一日付茅盾あての手紙（「文學評論」一九七八年第四期「李自成」についての書簡）でいう、

《小説でいえば、私は「紅樓夢」を研究したことがなく、讀みかたも詳しくありませんが、しかしその創作上での私に對する啓發はわりあい大きく、「三國演義」と「水滸傳」も私に對して助けとなりました。》

姚のいうように、「紅樓夢」は「李自成」のうえに、かなり大きな影をおとしている。とくに崇禎帝を中心とする宮廷生活の敘述は、まったく「紅樓夢」の世界といってもよい。皇帝の親族から軍事費をとりたてることに端を發した武清侯事件、それにかむ田貴妃の失寵、周皇后の誕生日のいらいごと、それにかむ陳順嫔ら宮女たちによる刺血寫經、陰謀による太子慈煥の死など、第二卷第二十九章から第三十三章まで五章にもわたって展開する皇后、貴妃、女官、宦官たちの暗闘は、大觀園に展開する王熙鳳を中心にした女性たちの暗闘と、なんらかわるところはない。崇禎帝は、賈寶玉と同じく、そのような事態の中にありながら、きわめて無力である。

りっぱな手本を得たのと、たしかな歴史深入によって、崇禎帝とそれにむらがる大臣、將軍、女官、宦官たちのおりなす宮廷生活をえがいた部分は、この小説のなかで占めるスペースにも對應して、きわめてリアリティーをもった、すぐれた部分となっている。茅盾も「長篇歴史小説「李自成」について」（「文學評論」一九七八年第二期）で次のようにいう、

《「宮廷内部闘争」は、崇禎宮廷のおおくの錯綜した複雑な内部矛盾を描寫する。矛盾の中心にいるのは、崇禎である。

作者はきめこまかい描寫を通して、形象的に三百年前のこの王朝の統治集團の救いようのない腐敗した、專横な、しかし無能な本質を再現し、明らかに讀者にこれらの細部の描寫のなかから明王朝の没落がすでに決定していることをみせる。これは歴史發展の規律である。崇禎の一切のがんばりは、多くともただ滅亡の時をひきのばしえるだけで、日に日にわるくなる危い狀況をひきもどすことは絶対にできない。しかも、崇禎個人の性格上の重大な缺點によって、かれの各種の生命をかけたいわゆる「精を勵まし治を圖る」という措置は、かえって明王朝滅亡の速度をはやめたのである。これはほんとうに絶大な諷刺である。

そしてあらゆるこの一切の錯綜した複雑な内部闘争はすべてフィクションでなく、すべて歴史の根源をもち、ここでは、歴史の眞實と藝術の眞實が、完全に一致する。』

かれは、さらにいう、

『宮廷生活およびその内部闘争というこの單元こそは、作者のこの論斷（崇禎の性格の各々の側面はかならず當時の典型環境とかれの皇帝生活のなかで表現せねばならない——譯者注）を表現するためである。そしてかれのこの企畫は、出色のできで完成したのである。』

「出色」という語が、茅盾の眞實の賛同をなによりもあらわしている。

三

以上みてきたように、宮廷生活の描寫でまず明らかなのは、姚の歴史深入、事實重視の態度だった。そこでは、多少のフィクションのふくらみはあっても、歴史の事實にフィクションが完全にしばらくつけられている。その快よい緊張關係が、面的な敘述スタイルとむすびついて、小説のこの部分を成功にみちびいたのである。

ところが、李自成ひきいる農民軍をえぐりやかたは、極端に言えば宮廷部分と正反對といってよい。そこは、フィクションが事實をひきずる場所であり、作者自身のことばでいえば、「歴史からの跳出」が「歴史への深入」よりも幅をきかす部分なのである。姚はそのようなフィクション主體の敘述を意識的におこなっており、「前言」でそのことを明言する。

《歴史から跳び出して傳説を利用することについては、第一巻にかいた潼關南原の大戦を例にあげることができる。この戦争の記載について、わりに早い史料は吳偉業の「綏寇紀略」巻六から出、馮蘇の「見聞隨筆」巻上に承けつがれている。戴笠の「懷陵流寇始終錄」巻十一もまたこの説をとるが、しかしちがったことばがある。「明史」は「曹變蛟傳」のなかにとりいれている。この説明のちにはかなり流行し、ずっと我が國現代史學界の李自成に關するいくらかの著作にまで影響している。私の研究によれば、この戦争はまったくおこっていない。しかし小説をかいている時、私は小説を完成する使命に着眼して、この傳説を採用し、それで李自成とかれの周圍の英雄人物が小説のなかで登場するやいなや武裝闘争の狂風暴雨、驚濤駭浪のなかにおり、全軍潰滅という殘酷なテストを通してかれらの英雄的形像を浮きぼりにするというのに都合よくした。つづいて李自成が革命の低潮のなかで、全軍潰滅のちに、自信喪失し、見通しが動揺するというのではなく、百折不撓の精神でもって、なんとかやりくりし、ひたすら回復につとめ、あらゆる方法を用いて新しい革命の高潮を推し動かすことをかいた。長篇小説には主題、副主題があり、そしてどの巻も相對的に獨立した主題をもつてさしかえない。さきにのべた革命の勝利に對する堅固な信心と百折不撓の精神は、第一巻をつらぬいている。潼關南原大战の傳説を採用したのはつまりこの巻の主題思想に奉仕したのである。》（第一巻・前言）

もう一つ、かれの發言をきいてみよう。

《眞實か虚偽かわからない傳説を採用することについては、李自成が穀城へゆき張獻忠と會見したことについてはなしを例にあげることができる。この事件は、吳偉業がまだ必ずしも信じられない傳説として、雙行の小字でもって「綏寇紀略」の本文のなかにわり注し、從來は歴史學者に重視されなかった。私はその何句かのわり注によって李自成が穀城にい

くという一つの「大事件」をえがき出し、傳説の内容を改造した。わたしがこのようにしたのは、李自成が全軍潰滅のあとというふうな方法を考え大局を動かしたかを表現し、同時に張獻忠という人物をつくりあげ、またかれらの間の関係と高低の差をえがきだし、さらに當時の歴史状況のいくらかの眞實状況をえがきだすのに有利だったからである。同時に私は考えた、明末の農民戦争は波瀾萬丈、錯綜複雑をきわめ、孤立して李自成をえがくことはできない。私が大西軍をえがいて大順軍の添えものとし、張獻忠をえがいて李自成の添えものとしたのは、當時の歴史の様子を反映するうえで必要なのである。》(第一卷・前言)

この二つの發言から、まづうかがえるのは、フィクションの採用は、小説の主題の展開に有利だということである。それは、具體的にはマルクス・レーニン主義、毛澤東思想を體現した農民英雄としての李自成、それにからむ人びとをきわだたせることにある。しかし、目的はそうであつても、フィクションの運用の方法については、中國の古典的な小説の方法を無視するわけにはいかない。そして、そういう古典的小説のなかで、もつとも「李自成」にとって參考となつたのは、明の羅貫中の「三國演義」だろう。

三國が鼎立するという状況は、歴史の變革期にはつきものである。二國間の對立であれば、往往にして冷戦状態をもたらしただけだが、これに一國が加わると、とたんに歴史は動きだす。この意味で、蜀・魏・吳の鼎立した三國時代は、中國歴史における變革期の状況の原型であり、「三國演義」は歴史の變革期をえがく小説の原型となつたのである。明末清初の變革期をえがいたこの歴史小説「李自成」も、その例外ではありえない。

また、歴史のかたちそのものが、明末と三國とはきわめて類似する。大順國をうちたてた李自成は、蜀の劉備にあたり、四川によつた大西國の張獻忠は、吳の孫權にあたり、さらに崇禎帝を中心とする明王朝、それをついだ清朝は、魏の曹操にあたるといえよう。李自成軍自體をみても、李自成の補佐たる李岩には、劉備の補佐諸葛亮がやや對應し、副首領格の劉宗敏、郝搖旗には、關羽、張飛などが對應しよう。こういう外面的條件によつても、「三國演義」が「李自成」に侵入することは十

分に考えられる。

そして、姚自身、さきにひいた茅盾あての手紙で、「『三國演義』と『水滸傳』も私に對して助けとなりました」とのべているばかりでなく、一九七五年五月二十五日付茅盾あての手紙（『文學評論』同前）にいう、

《また、この一組の詩ではただ私の『三國演義』に對するいくつかのみかたを提出しただけであって、それに對して全面的な分析、研究をおこなったのではなく、だからその藝術的にかがやかしい成功のところがそのほかのいくつかの不足のところに對してまったくまだ言及していません。その成功のところについては、學ぶに値するものが多いへん多いです。たとえば諸葛亮が山を出るのをえがいたところは、きわめて精采があります。孔明の身分、何人かの關連する人物の性格は、十分にきわだっています。徐庶の「馬を走らせて諸葛を薦む」（『三國演義』第三十六回——譯者注）ところはきわめて抒情味に富み、そしてまた文筆ゆめき、曲折しておもしろいです。さらに私に對して啓發が大きいのは、徐庶が孔明に道を譲ったことと虚構の筋を用いて孔明の非凡さをはっきりさせたことです。歴史によれば、孔明が山を出たあと徐庶はまだ劉備の軍中におり、かれは當陽にむかう路上でやっと別れたのです。小説がかれが先に去ったとしたことは、ただ「馬を走らせて諸葛を薦む」のすばらしい文章ができたばかりでなく、さらに重要なのはかれが諸葛亮のために道をゆずり、作者が筆墨を集中して突出的に諸葛亮の智謀をえがくのにより便利になったことです。博望の戦いはたいへん小さくて、三國時代には人に注意されず、しかも時間は孔明出山の前にあり、新野の戦いに至っては、おそろくなかったでしょう。『三國演義』が誇張して火もて博望を焼くのをえがき、その時間を後に移し、また新野の戦いを虚構したのは、すべて諸葛亮の智計で敵を挫くことをえがいて、孔明という人物が茅廬を出るやいなや戦争舞臺の中心となり、生き生きした動きをするようにさせるためです。長篇小説をかくうえで、英雄人物はどのように登場させるべきか、『三國演義』のこのところはすこぶる學ぶに値します。》

以上のべたような『三國演義』の「李自成」世界への侵入のあらわれとして、李自成も、その部下の將軍たちにも、時とし

て「三國演義」に登場する英雄たちのようなおもむきが感ぜられる。たとえば、「李自成」のなかで描かれている李自成の人となりは、

《大旗の前に、ひときわ高くて大きなたてがみとしっぽを剪りそろえた駿馬が立っており、身體ぜんたいは濃い灰色で、白いまだらがまじっており、卷き毛が多く、まるで龍のうろこのようだ。だから名は烏龍駒とよばれた。ある人たちはこの名を知らず、ただその毛色が黒くてまだらがあるのをみて、それを烏駁馬とよんだ。いまそのうえに騎っているのは三十一、二歳の戦士で、高いからだ、ひろい肩、顴骨は隆起し、額はひろく、高い鼻、深い眼、濃い眉毛、ふたつの炯炯とかがやきはりがあり、ちょうど前方を見つめて深く考えている大きな眼。このような眼はつねに人に一種の堅實な、沈着な、そしてまた智慧に富むという感じをあたえる。》（第一卷・第四章）

この記述は、直接には明らかに「明史・流賊傳」の記事を用いる。

《自成 人と爲り高い顴深い顴、鵠の目に曷の鼻、聲は豺の如し。性は猜忍にして、日に人を殺し足を断り心を刮きて戯れと爲す。過る所、民皆な塙堡を保ちて下らず。》

しかし、より本質的には、「三國演義」以来の歴史小説が英雄の姿かたちを敘述する傳統にそったものといえるのである。たとえば、演義第一回、劉備がはじめて張飛に出あうところは、

《玄德ふりかえりみると、その人は、身のたけ八尺、豹の頭に環のような眼、燕のおとがい虎のひげ、聲はいかづちのごとく、勢いはあれ馬のごとし。》（人民文學出版社排印本による。以下同じ。）

さらに關羽が登場するところは、

《玄德みやれば、その人は、身のたけ九尺、ひげの長さ二尺、かおは熟した棗のよう、くちびるはべにを塗ったよう、丹鳳の眼に鬚のまゆ毛、すがたは堂堂、威風は凜凜。》

これらの英雄の描寫は、「三國演義」のもととなっている晋の陳壽の「三國志」のかたちの傳には全くなく、裴松之の注に

もない。つまり、こういう描寫そのものが、明代にほぼ成立した「三國演義」などの小説世界における傳統といってよからう。それが「明史」にも影響を与えているのだらう。そうすると、姚はただ單に「三國演義」から直接影響をうけているばかりでなく、「明史」というフィルターを通したかたちでも、「三國演義」など小説世界の影響をうけていることになる。そしてかれ自身が「明史」などによって組み立ててきた「歴史科學」も、ある場合には、「小説藝術」そのものに轉化するだらう。かれのいう「歴史への深入」は、複雑な意味あいを持つといわねばなるまい。

さて、李自成の英雄としてのイメージは、立場上はともかく、劉備よりも關羽にちかとおもわれる。かれと烏龍駒との關係は、關羽とその愛馬赤兔馬に通ずるだらう。それは、英雄は當然かれにふさわしい馬にのるものだという「三國演義」世界のものである。

また、英雄は當然人とかけはなれた力と技をもっているもので、關羽が曹操の配下となつてまもなく、ただ一人赤兔馬にまたがつて酒のさめぬ間に袁紹がわの將軍顏良の首をうちとり、滿座のものすべてを驚かせた場面（第二十五回）は、かれの武將としての腕前をきわめてあざやかにきざみつけるが、李自成においても、そういう場面は用意されている。

《李自成は笑みを含んでうなずき、また親兵の手から二本の矢をもとめて、三本の矢をすべて手ににぎり、それから手綱をかるくもちあげると、その烏龍駒はきわめて主人の意をくみとり、ポンとはねあがると、二三歩かるく走り、つづいて四蹄空をゆくごとく奔走した。闖王は馬に騎つて演習場をぐるりと一まわりし、ふたたびむきをかえて、まとの前まではしつてきたとき、わずかにスピードをゆるめ、意に介せぬかのように手綱を鞍のうえにほっておき、左手で弓をあげ、右手で矢をつがえ弦をひいた。動作はひじょうに落ちついて迅速だった。烏龍駒がまたたく間にまとのちようど前を走りすぎようとしたとき、距離はだいたい百歩以上あり、人びとはかれがどのように矢を射るのか見ようとしたが、ほとんど聞にあわない。ただ弓絃がパシッ^{ゆんづる}とひと聲きこえると、一矢はちようどまとの中心を射ぬいていた。烏龍駒はつづいてからだ穩やかに空をゆくごとく奔走し、演習場のはしまでいくと、闖王が手綱をあげて意を示すのをまたず、かれは自分でス

ピードをゆるめ、頭をふりむけて、何歩かかる走りふたたび空をゆくごとく馳せた。このようにして三度まを走りぬけ、まとの中心は三べん射ぬかれ、矢は一個所にあつまり、きつちりとかたまっていた。關王のふだんの禁令はきびしく、演習場では勝手に話することは許されなかったけれども、やはり多くの人がこらえきれずに小聲で喝采した。人はよろこび、馬は蹄をふみならし、演習場全部が興奮した。》(第二卷・第四十三章)

さらに「三國演義」とのつながりを感じさせるのは、副首領の劉宗敏という人物である。この武將は、關羽の沈着さが主だが、時には張飛の快活さをもあわせ持つ。第二卷第七章、李自成が石門谷にゆき、留守のあいだ、商洛山中の農民軍の指揮をとり、計略で宋家寨の土豪たちをつかまえるところは、關羽が劉備のいない荊州の城をひとり守るという状況(第七十三回)を想起させるが、さらに、李自成本隊を逃すため奮闘し、明軍に斷崖絶壁においてつめられたところをあげよう。

《官軍は劉宗敏の矢がおわたのをみて、またかれをいけどりにして北京におくろうともくろみ、矢を射るのをやめ、かれにどっとかかっていった。宗敏はかれの三人の親兵がだいたいで江をわたったと考え、また自分もいそいで離れて、敵の手に落ちるのを免れようと決心した。かれの戦馬はかれの心意をさとしたのかそれとも敵の接近をみたからか、とつぜんたてがみをふり尾をあげ、ヒヒーンといかないた。劉宗敏は大喝一聲、山や谷にこだますると、刀をふるって敵に突っかかっていった。官軍は突然かれの雄叫びを聞いて、戦慄してどうしていいかわからず、どんどん後退し、たがいに押しあい踏みつけあった。宗敏は機をみて馬頭を轉じ、うつむいて女の子をつかみあげると鞍の上におき、斷崖まで走って、不意に一むちたいた。ふとみればあのまっ白な戦馬はいなずまのように斷崖から空にのぼって舞いあがり、碧空にはいつてゆくと、二丈ばかりで下に落ちてゆき、江^{かわ}ぞに沈み、はねあがったしぶきに銀の光がきらめいた。》(第二卷・第二十六章)

このような風景は、まったく軍記物語の一コマのようであり、それは「三國演義」の世界そのものである。ここでは、張飛が劉備を逃すため、當陽の長坂坡で曹操の大軍にひとり立ちむかい、橋をおとしてみごと追いかえた場面(第四十二回)と、

劉備が劉表の手から逃れ、名馬の盧にのって潼溪の流れをこえる場面（第三十四回）があわさったようになっている。

將軍の一人である郝搖旗は、人物の造型からして、張飛を意識したところがある。ほんとうは好人物なのだが、行動が無鐵砲でまわりからは誤解されがちであり、時には失敗もするというところ、張飛と同じく、どこか三枚目的で人間的な魅力にあふれている。

また、ストーリー展開のうえでも、李自成の軍師たる李岩の出獄と諸葛亮の出山とは、関連性を感じさせ、そして李岩自身、明朝への不平の氣をもらした「沁園春」の詞には、「隆中の策は、將來細かに説くを待たん、羽扇從容たり」の句があり、明らかに諸葛亮との関連を示している（第二卷・第十八章）。

四

ところで、「李自成」の「三國演義」世界との融合は、さきにも述べたように、姚が意識的にフィクションを駆使する上で一つの方向だった。それは、「三國演義」のみならず、それ以後の講史小説、また「水滸傳」にはじまる武俠小説などの傳統をふまえていよう。しかるに、「李自成」においては、やはり農民軍をえがいた部分に、フィクションのはたらく方向として、そのような古典小説の傳統と全く異なった意味あいのもう一つの方向がみられる。それは、「李自成」の世界と現代中國との融合とでもいべきものである。

さきに姚自身が「眞實か虚偽かわからない傳説を採用する」例としてあげた、李自成が張獻忠の本據地穀城へ出むいての會見は、姚の説明では「當時の歴史狀勢のいくらかの眞實狀況をえがきだすのに有利だったからである」（第一卷・前言）といっているが、けっしてそれのみではあるまい。李自成は商洛山中から、部下たちのしつような反對を押しきり、醫者の尙炯だけをひきつれて穀城の張獻忠のもとへいき、共に起ちあがって明王朝を倒そうと談判する。このとき李は、張の部下の陰謀によ

り、あやうく殺されかけるといふ危険な状況におちこむ（第一卷・第六章）。この一段を読んで、少なくとも現代中國の歴史に關心のある者なら、すぐさま類似した歴史状況を想起するはずだ。それは、一九四五年八月、毛澤東が周恩來をひきつれ、危険きわまりない重慶にとんで、國民黨首たる蔣介石と四十日餘りにおよぶ交渉をおこなった、いわゆる重慶會談である。姚は、あきらかに現代中國に入りこんでいる。

さらに、商洛山中で農民軍が明軍の包圍をこらえているさなか、石門谷で新たに農民軍に加わったばかりの土寇が反亂をおこすという大變な事態になったとき、李自成みずから少數の部下をしたがえただけで反亂軍のまったくのりこんでゆく場面（第二卷・第八章）も、やはり重慶會談をいくらか反映しているようだ。

また、李自成軍は商洛山中から脱出し、張獻忠に援助を求めたものの、張に拒絶され、やっとのことで張軍の追撃をふりきっておちついたが、軍の總數は、家族や少年兵をもふくめて千二百人にもたりないということになった。そこで、李自成はいう、

《ヘン、李闖王ことわしは三頭六臂をもつてゐるわけじゃない！ 民衆が官軍に奸淫掠奪され焼き殺されたのを恨むんで、わしらはむりにでも兵を討伐して民を安んじ、商洛山中の民衆が官兵の災いを受けぬように保護してやったのだ。民衆たちが代代土豪大家の搾取壓迫を受けつくしたんで、わしらは土豪大家を懲らしめ、民衆のためにぬれぎぬをはらし仇をうってやったのだ。民衆が官府に穀物や小作料を催促され、苛酷な税金、雑多な税金は牛毛のように多く、その結果民衆が生きていけないことをひどく恨むんで、わしらは官府が人を商洛山中に派遣して、穀物や金をとりたてるのを許さなかったのだ。みのりが悪く災いが大きいと、民衆たちが家を離れ他方に逃れ、流浪してあてどなしというのでなければ、餓死をまつということになるので、わしらは山寨を破り、富豪をうち、食糧を手に入れると半分をさいて飢民を救済してやったのだ。これらの方法によって、わしらはやっとこさ商洛山中で一つ一つの難關を突破し、生死の瀬戸ぎわを一回一回くぐりぬけ、ついには安全に圍みを突破することができたのだ。……》（第二卷・第二十八章）

ここで「官軍」を蔣介石ひきいる國民黨軍に、商洛山を井岡山にのみかえるなら、これらのことばは、一九三五年十月、一年をついやして一萬二千キロあまりを踏破し、陝西省保安の吳起鎮にたどりついた毛澤東が、十萬から七、八千に減少した紅軍兵士にかたりかけたことばとしても、それほど不自然ではあるまい。

さらに、李自成軍兵士たちの商洛山中における食糧自給、武器製造の生活は、隨所で井岡山の紅軍兵士を想起させる。

このような明末たるべき「李自成」の世界と現代中國世界の融合は、わたしだけが感じているのではない。中國の讀者もそのことに氣がついている。たとえば、「南京大學學報」一九七八年第四期にのった董健の「姚雪垠の歴史觀とかれの造りあげた李自成」は、このべている。

《同時に、小説は李自成的民主的作風、大衆的觀點、遊擊戰爭の戰略戰術などの方面で、すべてかなり濃厚な現代化の色彩をぬりつけて、かれにいささか現代プロレタリア階級の政治家や軍事首腦の氣概と風格をおびさせている。まったく、李自成という人はたしかにかれと同時代の農民首領たる人物をこえた多くの美德と好い作風をもっている。史料の記載によれば、かれはよく部下と「甘苦を共にし」、「凡ての事は皆な衆共に之を謀り」、「衆を集めて各おの其の志を呈し」た、などなど。しかし、古代農民が小農經濟、平均主義の基礎の上にうちたてた民主思想は、現代プロレタリア階級の大衆路線と民主集中制とは、ひじょうに大きくかけ離れたものである。かれらは歴史唯物主義を理解できず、自覺的に廣大な人民大衆の作用を認識することが不可能である。しかし小説は少なからぬ描寫のなかで、まるで李自成が大衆の作用に對して明確な認識をもち、個人と大衆との關係をかなり正確に處置しているようにえがく。さらに戰爭からいえば、歴史にはかれが「走るを善くし」、「攻むるを善くし」、「力多して射るを善くす」などと記載し、軍を治めるうではかなり大したもののだけでも、しかしけつきよくかれがやったのは流賊主義であり、われわれ紅軍、八路軍の遊擊戰爭の戰略戰術と本質的な區別があるのである。毛主席は「李闖式の流賊主義」をおかしてはいけないといったことがあるが、（黨内のあやまった思想の是正について）「毛澤東選集」第一卷——譯者注）、しかるに小説はこのような流賊主義に對して明らかな批判

を少しもしていない。たとえ小説が李自成は李岩の提出した「宛洛を以って立脚地と爲す」という建議を受けつけなかったとかいていても、つづけてこれは「實際から出發し、大軍が中原をかけまわり、進退もおもいのままということには有利である」というのである。李自成の商洛山での練兵、反「包圍討伐」、馬を漢南に息めることなど、すべて描かれかたに少しばかりわれわれの井岡山闘争の味わいがある。』

ここで指摘された「李自成」の現代中國化は、李以外の人物にもみられる。たとえば、かれは紅娘子が獄中の李岩を救う場面（第二卷・第三十七章）について、こうのべる、

『……紅娘子が杞縣城を破ってかれを救い出獄させるに至っては、絶対にそんな事件はなかったと斷言してよい。野史のなかの紅娘子は、ほんとうにそんな人がいたか定かでない。わたしは小説ではかれの出身と紅娘子がかれを救い出獄させることについて、まったくたよりにならぬ傳説に依り、そして歴史の眞偽の問題をわきにおいた。……紅娘子はありもしない人物だけれども、しかし王莽の新時代から清代に到るまで、婦人が農民蜂起に参加したことは歴史にずっと書きつづけられており、そしていくらかの婦人は意外にも蜂起の火つけ役や首領であり、これこそ私に紅娘子を創造する歴史的基礎を提供してくれたのである。』（第一卷・前言）

これは、人民共和國成立後、毛澤東が提唱した婦人解放と、「女性は天の半分をささえる」という有名なスローガンにおそらく對應するものである。そしてこの小説では紅娘子のみならず、李自成の夫人たる高桂英、その付け人慧英、慧梅などの女性かなりの役割をおびて登場し、何章かは彼女たちのために設けられているほどである。

五

ここで、以上にのべてきたことをまとめてみると、小説「李自成」は大きく二つの部分にわけられる。一つは、事實重視、

歴史深入の方向をもつ部分であり、崇禎帝の宮廷生活をめぐる敘述がこれにあたる。もう一つは、フィクション重視、歴史跳出の方向をもつ部分であり、李自成の農民軍をめぐる敘述がこれにあたる。そして、フィクションのはたらかたには二とおりあって、一つは「三國演義」を中心とする古典的歴史小説の世界にひきつける方向、もう一つは、毛澤東のひきいる中國共產黨支配下の現代世界にひっぱる方向である。

ところで、姚が「三國演義」の世界を「李自成」のなかに導入したのは、それなりの理由がある。つまり、「三國演義」が民衆に對してもたらず効果を、かれははっきり認識しており、それを「李自成」において採用したのである。「三國演義」の英雄たち關羽、張飛らは、現代中國の民衆たちにきわめて人氣があり、そのストーリー展開のメリハリを導入すれば、確實に民衆に喜ばれるということを、かれは意識していただろう。その一端は、さきにあげた茅盾あての手紙にあらわれている。この意味において、かれは民衆に奉仕しているといえる。

しかし、民衆への奉仕は、じつは現代の中國文藝界を支配している毛澤東文藝路線の中心なのである。一九四二年、毛がいわゆる「文藝講話」を發表して、「人民に奉仕せよ」と呼びかけてより、作家は民衆のために創作しなければならなくなり、さらにはマルクス・レーニン主義、毛澤東思想にふさわしいプロレタリア階級的英雄の創造に邁進しなければならなくなった。かれらは、本來ならば「三國演義」の英雄たちのように、民衆に喜ばれる英雄を創造すべきだったのだが、しかしその段階をつきぬけて、江青らの唱えた「三突出理論」（あらゆる人物の中で肯定的人物をきわだたせ、すべての肯定的人物の中では英雄的人物をきわだたせ、すべての英雄的人物の中では主要な英雄的人物をきわだたせる）などに象徴されるごとく、けっきょくは民衆と無關係な、全く缺點のない非人間的な英雄たちを輩出することになってしまった。しかし、その方向は、毛澤東文藝路線にそって創作していくかぎり、必然だったのである。姚雪垠も、もちろんその例外ではありえない。

かれは、李自成たちを「三國演義」の英雄に近づけて、ただ單に民衆に喜ばれるだけでは、満足できなかった。かれの不滿は、毛澤東文藝路線にまだ密着しきつていず、まだ安心感を得られないというところから來たのだろう。その不滿は、かれの

内面的要請からもたらされたのみならず、外面的な政治的な要請からもたらされたい。そこで、かれには、「李自成」の英雄たちを、現代において路線を主導している毛澤東その人、さらには毛のひきいる中國共產黨の指導者たちに比擬して、英雄たちを神聖化し、自己の不満を解消しようとする志向が生まれた。ここに、「李自成」の世界と現代中國との融合がはじまったのである。

「李自成」において、「三國演義」世界と現代中國世界とが、民衆への奉仕と、それにもとづくフィクション導入によって緊密にむすびついていることは、以上において明らかになったと思うが、この民衆への奉仕、それにもとづくフィクション導入は、いわゆる歴史小説一般において、多かれ少なかれ共通するといえよう。それは、中國のみならず、日本においてもかなり普遍的である。しかし、この民衆への奉仕が、毛の「文藝講話」のテーゼを通して毛澤東文藝路線というかたちをとったとき、その路線のもとで生まれた歴史小説は、フィクション導入のかたちにおいても、現代中國のイデオロギーの刻印を逃がれることはできない。その意味で、姚の「李自成」は、部分的ではあるが、まさしく現代中國のイデオロギーに從屬している。ところが、これは「三國演義」も全く同様であり、この面でも両者は關連するのである。

「三國演義」の世界とは、いったいどういうものだろうか。それは、一言でいうなら、朱子學の正統思想による、蜀を正統とした勸善懲惡のイデオロギーが支配する世界であり、そのいわゆる正義を強調するため、フィクションが導入され、歴史の事實でさえ時にはかえられてしまうのだ。この状況は、まさしく現代中國における「李自成」の状況そのものである。ただ、現代では、實質は勸善懲惡でありながら、表むきはマルクス・レーニン主義、毛澤東思想という名前のついたイデオロギーが充満しているにすぎない。そのことは、現代中國における「三國演義」「水滸傳」などのすばらしい賣れゆきによって、逆に證明できよう。

ところで、「三國演義」は、民衆に歴史から歸納した勸善懲惡のイデオロギーを流布するという啓蒙的な役割をもっていたが、この現代中國の歴史小説「李自成」においても、姚はその役割を免れることはできなかった。その啓蒙性は、「古を

今の用と爲す」というかたちで發揮されるのである。

『李自成』をかきはじめる前とかいている途中で、私はなんと歴史的題材はどうしたら古を今の用と爲すことになるかという問題について思索したかわからない。私の考えかたによれば、歴史小説は古を今の用と爲すという目的を達するために、三つの重要な方面をもつ。第一は作家が作品のなかで深刻に歴史變化の運動法則と經驗教訓を反映し、今人に供して参考とし、歴史上の階級闘争のすがたをかき出して、今人を教育する。第二は作家が現代プロレタリア階級の立場觀點から出發し、歴史人物に對して愛憎をはっきりさせ、褒むるも有り貶しめるも有り、その結果讀者は小説から何を愛し、何を憎むかを理解し、かつ古代の英雄人物から鼓舞、啓發と感化をうけ、革命事業に獻身する激情、勇氣と決心を強め、同時に古人の經驗を吸收するから智慧を増すことにもなる。第三、歴史小説は讀者の醜惡な事物に對する憎しみを増強することができ、やはりまた古を今の用と爲すの一つの重要な方面である。しかしさらに重要なのは進歩的英雄の教育と鼓舞の作用である。』(第一卷・前言)

これほどはつきりした啓蒙への決意をよむと、イデオロギー支配の貫徹した「三國演義」と現代中國の狀況の類似性が、よりいっそう明確になる。そして、イデオロギー支配の場のなかで、その要請にそう啓蒙性をつよめ、マルクス・レーニン主義の英雄をつくりだそうとするならば、その英雄は、神聖化、非人間化の道をたどるしかない。

「三國演義」の主人公劉備は、勸善懲惡イデオロギーにしばりつけられた結果、魯迅の「中國小説史略」では、諸葛亮ともども、

《人を寫すに至りては、亦た頗る失する有り、以つて劉備の長厚を顯さんと欲して偽に似、諸葛の智多きを狀せんとして妖に近きを致す。》

と、その非人間性、神聖化を指摘されたが、イデオロギーの化身のような主人公にあつては、本質的に免れがたいのである。それは、李自成においても、全く同様である。姚はみずからその非人間化、神聖化の過程をのべている。

《私が歴史に深入する研究をへたのちに斷固として流行の傳説を放棄したのでは、李自成が崇禎十三年の冬河南に進入する前かつて「魚復諸山」で包圍されたという見解を例にあげてよい。この傳説は潼關南原大戰の傳説よりもっと流行しているだろう。「明史」の「流賊傳」の整理採用をへて、はなしの前後の脈絡ははつきりし、首尾はととのった。それがほとんど定論となつたので、わが國の現代の李自成に關する著作でも多く採用している。その實、このはなしは完全にとらえどころのない話で、すこしも事實の根據がないのである。》（第一卷・前言）

姚が斷固として放棄した傳説というのは、「明史・流賊傳」によるところである。

《楊嗣昌 師を夷陵に督し、檄して降ら令むるも、自成 謾語を出だす。官軍 自成を巴西、魚復諸山の中に圍む。自成 大いに困しみ、自經せんと欲す。養子雙喜 勸めて止む。賊將 多く出で降る。劉宗敏なる者、藍田の鍛工也。最も驍勇なるも、亦た降らんと欲す。自成 與に歩みて叢祠に入り、顧みて歎じて曰わく、人は我當に天子と爲るべしと言ふ、蓋んぞ之を卜わざる、吉ならずんば、我が頭を斷ち以つて降れと。宗敏諾し、三たび卜い三たび吉なり。宗敏還りて、其の兩妻を殺し、自成に謂いて曰わく、吾れ死ぬまで君に従う矣と。軍中の壯士之を聞き、亦た妻子を殺して従うことを願う者多し。自成 乃ち盡く輜重を焚き、輕騎もて郎、均由り河南に走る。》

私などが考えれば、こういう事件があつたほうが、むしろナミの人間、等身大の人間として、李自成を身近に感じることができるのだが、姚は「斷固」として拒否する。イデオロギーによるいやおうなしの神聖化、擴大をへて、李自成はますます非人間性をますのである。

董健もさきにあげた論文で、こういう感想をのべている、

《李自成という明末農民革命の首領は、姚雪垠同志が作品のなかで滿腔の熱情をこめて歌いあげた最も主要な英雄人物である。この人物の描寫はかなり出色のきである。しかし、ちょうど歴史上の多くの優秀作品にいつも存在する狀況と同じく、「李自成」にもこのような狀況が存在する——作者が力をいれて浮きぼりにし歌いあげた主要人物が、決して最も

よく造りあげられた典型ではない。小説を読んで、感じたのはやはり崇禎、劉宗敏、張獻忠、郝搖旗などのような人物がより精彩にとみ、より感動をもたらし、よりかめばかむほど味がでる藝術典型といえることである。そして李自成は、すこしきつくいえば、かれはまるでただ「導火線」の作用をおこし、一つらなりの人物や事件の、人の心を驚かす巨大なとどろきを引き出すだけで、かれ自身の形象は、くらべてみるとやや遜色あるようにおもふ。》

ところで、民衆への奉仕をよびかける毛澤東文藝路線の提唱者毛澤東その人が、じつは少年時代「三國演義」の愛讀者だったことは、よく知られており、「實踐論」などにも「眉根をよせれば一計浮かぶ」といった引用があつて、それを證明する。ここにも、「三國演義」と現代中國と「李自成」とを結び結び目がみられるが、さらにいえば、表面的には西方のマルクス・レーニンからもたらされた毛澤東思想の底には、おそらく「三國演義」からの勸善懲惡イデオロギーが奥深く秘められているのだろう。「三國演義」が毛の戦術戦略の参考となったことは、すでにいろいろ言及されているが、それだけではなからう。

六

「三國演義」と現代中國の兩者に通ずる勸善懲惡イデオロギーにささえられた農民軍がわのフィクションによる敘述は、民衆に奉仕したものであり、民衆の喜ぶものだった。それに對して、事實重視、歴史深入の宮廷生活がわの敘述は、それが「科學」であるかぎり、イデオロギーなどという夾雜物を完全に排除すべきであり、またそうしようとしてきた。これは、合理性への志向といつてもよく、より知識人的であるといつてよい。そして、歴史小説も時代とともにより合理的になってゆく、イデオロギーによる民衆呪縛の道具から歴史事實そのものの持つ意味あいを見きわめるものへとかわってゆくのだとすれば、「李自成」における宮廷部分と農民軍部分との敘述上の乖離は本來ありえず、小説すべてがより事實重視を基本にした敘述スタイルに收斂していったはずである。

さらにいえば、その方向こそ、知識人に他ならぬ姚雪垠自身の資質にあうものだったろう。かれは河南省鄧縣の人で、一九〇八年に生まれた。かれは農村で生長したのだが、長篇小説「長夜」の後記で次のようにいう、

《私の故郷は河南西南部の部落であり、とざされておかれていて、以前には、土匪はこの地方の有名な特産物だった。私は落ちぶれた地主の家に生まれた。私は農民を愛していたけれども、しかし「農民の息子」ではなかった。いま私が願うと願うまいと、私の魂のうちには濃厚な「知識分子の氣風」がある。》(王瑤「中國新文學史稿」下冊の引用による)

かれの経歴も、かれが知識人にほかならぬことを證明する。主に趙聰の「現代中國作家列傳」によれば、高級中學生のころ、すでにもう新聞・雑誌に投稿しはじめ、丁玲主編の「北斗」、胡繩主編の「讀書生活」などに作品が發表された。一九三〇年、かれは河南大學に入學したが三二年に學校をやめ、三三年、義光女子中學で教師となるが、半年いただけでやめた。三七年、抗日戰爭が勃發し、かれは轉々と大後方たる重慶まで逃げた。三八年春、茅盾が香港で出していた「文藝陣地」にかれの短篇「車半臺分以下の麥わら」(半人前以下という意味)を發表すると、共產黨の作家たちが重慶の「新華日報」で大いにもちあげ、「農民作家」の稱號をたてまつり、一躍文名があがったという。

これが、作家としての姚雪垠の出發である。注意すべきは、この出世作の内容である。小説は、「車半臺分以下の麥わら」と仇名される無知な農民が、ひまをもてあまし、いかげんな調子で遊撃隊に参加し、あまつさえ隊旗を盗んでもってかえり、子どものおしめしようとするさまを描いている。このような後れた自分勝手な農民は、かれが自身で造型しえたと考えるより、むしろ當時實際に存在した農民の形態にかなり忠實だったと考えるほうが、妥當だろう。かれの知識人作家としての資質は、この出世作からみるならば、歴史小説においては、小説よりも歴史、フィクションよりも事實の方向においてよりよく發揮されたと思える。それゆえにこそ、宮廷敘述の部分は、「李自成」のなかでもっとも成功した部分となったのである。

餘談をいえば、中國の歴史小説が荒唐無稽な「全相三國志平話」、イデオロギーの支配下にある「三國演義」などから、清代の講史小説などをへて、歴史的事實を追求する「李自成」の一部分へと變化してきたのに對應して、日本でも、荒唐無稽な

「立川文庫」の講談本、勸善懲惡のイデオロギーに満ちた吉川英治の「宮本武藏」から、フィクションのふくらみは多少あるものの、歴史事實主體の司馬遼太郎の諸小説へ、さらには歴史書の記述のごとくフィクションをきりすてた大佛次郎の「天皇の世紀」へという歴史小説の流れがある。この流れのかたちは、小説から歴史へといつてよく、より合理性をもとめる方向にある。これは、もちろん日本の状況に對應して生まれてきた流れだが、吉川英治よりも、司馬、大佛がより知識人であるという点にも注目すべきである。合理性への志向、それによる歴史的事實の追求が、知識人の本来持つ資質にあうという、これも一つの證據になろう。

しかるに、實際の「李自成」において、姚はみずからの資質にそむき、農民軍のがわにおいて過度にフィクションを採用した。それは、知識人としての弱さといえるかもしれない。とくに、李自成などの神聖化、非人間化は、知識人としてはもつとも耐えがたかつたはずである。しかし、かれはあえてやった。その理由となるものは、大きく二つ考えられる。一つは、かれ自身のなかに蓄積された過去の苦い體驗である。もう一つは、現代中國の状況そのものからくる壓迫である。

まったく、かれの過去は、共產黨の文藝面でのイデオロギーたる毛澤東文藝路線に翻弄され、裏切られ、痛めつけられることの繰り返しかえしだった。趙聰によれば、一九三八年、「車半臺分以下の麥わら」によって文名があがると、本來黨員作家ではなく、思想も左傾していなかった姚は、だんだん左傾し、「牛全徳と紅だいこん」、「從軍中の戀」など共產黨の教條にあわせ概念化のつよい長篇小説をかいた。この時期、かれは郭沫若指導下の「戦地工作團」に参加し、安徽省立煌縣の敵後工作にいった。戦區からかえつて後、周恩來がかれを食事に招待し、かれは感激して涙をこぼしたという。人にあえばかならずこの話を持ちだした。しかし國民黨の方でも、このときは作家をだきこむ工作を進め、姚は重慶で創作していたので、生活は完全に國民政府の按配にたよっていた。日がたつにつれ、思想はまた左傾から右傾に轉じた。共產黨はかれの事情がおもしろくないとみると、突然顔つきを變えて打撃を與え、共產黨の雑誌にかれの作品をのせないばかりか、かれの作品の出版廣告をのせることすら、重慶の「新華日報」は拒絶した。たとえ刊行されても、必ず目次上のかれの名をけずった。この間の事情を象

徴するエピソードがつたわっている。重慶の文協（中華全國文藝界抗敵協會）が原稿料問題を討論するために會を開いたとき、もち出したスローガンは、「千字で斗米」だった。姚は區別があるべきだと主張し、この主張を強調するために、かれは妓女をあげて例とした。「たとえば、くるわ遊びでは、賣れっ子の價格は、年老い色衰えた妓女にくらべて何倍高いことか！」こういうわけで、新華日報はかれを「娼妓作家」と罵ったのだ。

この他にも、共産黨は「希望」などの雑誌で、二年あまりにわたってかれの有名な長篇小説「春暖かに花咲くころ」を攻撃している。そしてその後出版された長篇小説「長夜」は、河南土匪をえがいた物語で、書中に匪言匪語、いわゆる「黑話」をつかつており、「李自成」をかくうえて最も参考になったとおもわれるのだが、共産黨からうとまれていたために、出版されてもあまり人の注意をひかなかった。

四五年、抗戰勝利の後、文化人たちは次つぎと北京や上海に復員していったが、かれは國民黨の特務という汚名をきせられたために、人から相手にされず、こつそりと故郷に歸るしかなかった。しかし落ちぶれては、生活もやっていけず、國共の戦争がはじまると、かれは上海に逃げた。はじめは臺灣にいかうとおもっていたのだが、どういわけか周恩來に會い、そこで臺灣行きをやめた。このとき、かれはまた右から左に轉じた。

四九年の解放後、かれは中國作家協會武漢分會に派遣され、補助金をもらう專業作家になった。しかし黨員作家でないために、いたるところで壓迫と排斥をうけた。作品をかいてものせてもらえず、印稅收入もなく、生活は困難をきわめた。かれは、このころから「李自成」をかきはじめる。

五一年、全國文藝整風運動がおこり、中南區ではかれも攻撃目標となった。その後河南文聯（中國文學藝術界聯合會）の機關誌「奔流」に、ときどきかれの短篇小説が發表されたが、まったく人の重視を受けなかった。かれがたまたま一級新聞などに評論を一二篇發表したときには、往往にして發表後すぐ、共産黨文人の圍攻をうけた。五七年、「百花齊放・百家爭鳴」の號令のもとに「大鳴大放」運動が展開されると、姚は「文藝報」に、「素朴で豪邁で生活の色彩に富んだ藝術」（第六號）、「天

窓をあけてはつきり言おう」(第七號)、「廣く建言の路を開かねばならない」(第八號)と矢つぎばやに發表し、かれのそれまでの創作・生活にわたる不満をぶちまけた。それらでは、文藝界における「官僚主義」「教條主義」「セクト主義」をきわめて的確に批判し、毛澤東「文藝講話」にしばられて、生活からでなく主觀から出發し、公式化・概念化された作品しか生みだせない作家たちを批判する。このときのかれには、自分の作品で英雄の神聖化をおこなうことなど、想像もつかなかっただろう。ところが、「大鳴大放」は突然「反右派鬭争」に一變し、いうまでもなく、かれは右派に入れられ、「黒五類」の牛鬼蛇神となつたのである。

文革中も、姚はやはり痛めつけられた。近着の「文藝報」一九七九年第二期にのつたかれの「歴史の経験を漫談する」によれば、一九六二年、杜甫の生誕一千二百五十周年にあたるこの年、「長江文藝」編集部は、かれが解放前に「杜甫傳」の何章かを執筆したのを知っていて、かれに文章をかくよう求めた。そこで、かれは杜甫の成都の草堂での生活をかいた一章を整理して、「草堂春秋」と題して發表した。ところが六四年秋、陳翔鶴の歴史短篇「陶淵明、挽歌をかく」が反黨反社會主義の毒草として、北京で批判されると、「湖北省と武漢市は「草堂春秋」を批判することを決定し、二組の文章班を組織し、きままに歪曲して、とめどなく、新聞雑誌でひとしきり批判した。いずれにせよ私は釋明する權利無く、さらに答辯をもしなかつたので、むりやりにまるで敵をうつごとく、私の名前をひどいものにしようとした。それ以來私も「杜甫傳」をかかなくなり、すであつた原稿もなくなつてしまつた。」

文革がおさまると、かれは幸いにも解放されたようだが、しかし四人組全盛時代になると、また壓迫をうけることになった。はじめにもひいた「黨が私にくれた藝術の新生命だ」——作家姚雪垠を訪ねて」によれば、

《記者がはじめてかれを訪問したのは、やはり一九七五年の初冬で、かれの武漢の寓居においてだつた。その時は、「李自成」第二卷が脱稿してからすでに一年あまりたつていた。しかし、「四人組」の反革命的な修正主義文藝路線の統制のもとで、書稿が遅延として出版できないばかりでなく、創作さえもつづけていくのがひじょうに困難だつた。やむにやま

れずかれは毛主席に手紙をかき、支持をもらえるよう望んだ。》

毛は手紙をよむと、すぐさま支持を示したので、かれは十二月に北京へいって、第二巻の出版にとりかかったという。以上みてきたように、かれの過去は、毛澤東文藝路線のイデオロギーによる受難の連続だった。それは、逆にみれば、そのイデオロギーにはむかいつづける歴史だったといってもよい。その苛酷な歴史のなかでは、いかなる人間も平常心を持ちえない。かれの知識人としての作家としての轉換は、ある意味では當然だったのである。

七

しかし、かれの受難は、過去だけでおわったのでは決していない。それは、現在でもなお續いているのだ。姚の「前言」で李自成政權に對する歴史的分析が、いわゆる歴史學者たちにもたらした波紋をみれば、そのことは理解されよう。

小説における神聖化された李自成はべつとして、姚はかれの歴史觀をより率直に明瞭にのべた「前言」では、イデオロギーを排除して、より科學的に李自成を分析している。そこで「李自成は帝王思想をもっていたのか」「李自成は天命觀をもっていたのか」「李自成は反孔だったのか」と三つ問題を設定し、歴史科學的な立場から、いずれの問いに對しても肯定的に答える。その結果、かれはこういう結論に達した。

《李自成という人物をとりあげていえば、かれは封建社會で農民蜂起を指導した傑出的英雄だが、しかしかれは決して超人ではない。われわれはかれの各種の考え方や具體的活動がすべて歴史條件の制約を受けねばならなかったということをおろそかにはできず、あれだけの現代人であつてはじめて持ちえる思想や行動をかれのうえに描くことはできない。かれは歴史上の悲劇的英雄である。私はかれが堅固な根據地をうちたてなかつたためには失敗した悲劇の中に黃巢のすがたを見た。かれはかつて非常に短い、あいかわらず孔孟を統治思想とする封建帝國をうちたて、大順皇帝と稱したので、

私はまたかれのうえに朱元璋のすがたも見た。》(第一卷・前言)

さらに、かれは李自成みずから自分の犯した誤りをみとめるという場面を設定して、その神聖化、非人間化をくいとめようともしているのである。將軍の一人郝搖旗にむかつて、かれは潼關南原における指導の誤りを分析する。

《『いいや、おまえはわしのいうのを聞け。崇禎十一年夏、わしらは漢中あたりの山中で、集中の態勢を分散にかえ、人馬を休養させていたので、まったくあわてて東行しなくてもよかったのだ。あのときわしは計算まちがいをして、ひたすら羅汝才、老回回たちといっしょになろうとおもったので、人馬を召集すると、すぐ東に奔走したのだが、これでこそ洪承疇や孫傳庭が全力でもってわしらに對應できたのだ。東に向かったからには、わしは全軍をひきいて均、鄖、房縣一帯に奔走すべきであり、強硬な態度で強硬な相手にぶつかり、直ちに潼關にゆくべきではなかった。もしわしらが均、鄖、房縣一帯に奔走したならば、洪承疇や孫傳庭はわしらがすでに湖廣にたどりついた、つまり熊文燾の管轄地區に入ったのだから、當然死力をつくしてわしらをおいづめるはずがなく、熊文燾がわしらを打とうとすれば穀城に駐屯している張敬軒を顧慮しないわけにはいかない。いわんや潼關付近は、地勢が險しく、洪承疇、孫傳庭の本據地西安にもまた近く、わしらにとって非常に不利である。だからこの何カ月かおもいかえすと、わが軍が潼關南原で全軍潰滅したのは、すべてわし自身の誤りだったと深く後悔しているのだ。……』》(第二卷・第四十九章)

こういった李自成の神聖化を否定する敘述はごく一部であり、しかも全體からみると非常に浮きあがっていてリアリティに乏しいという印象をうけるのだが、「前言」の見解を表現しようとする、知識人としての姚雪垠の奥深い願望は感ぜられる。ところが、この李自成神聖化の否定に對して、中國ではすぐさまいくつかの反論があらわれた。たとえば邱樹森の「古代の蜂起農民に自己の思想的武器はあるのか——姚雪垠同志と討論する」(「南京大學學報」一九七八年第四期)では、「前言」のさきにあげたあたりを根據にして、「姚雪垠同志は完全に古代の蜂起農民が自分の思想、理想や主義をもつことを否定した」と論斷し、かみついている。

また李錦全の「試みに李自成の思想を論ず——かねて姚雪垠同志と封建社會中の農民革命に關するいくつかの理論問題を討論する」(「學術研究」一九七八年第三期)では、歴史性をまったく考慮せずに、マルクス・レーニンの片言隻句をむりやり李自成におしつけ、かれを過度に神聖化したあげく、

《しかし姚雪垠同志はもう一つの極端に走り、あつさりと歴史上に農民政權が存在したことを否定し、農民革命の首領が反孔の可能性をもっていたことを否定し、かれらは革命に起ちあがると、「眞命天子」になろうとした、うちたてえたものも孔・孟を統治思想とする封建帝國にすぎなかったというが、このような觀點も當然かたよつたものであり、農民革命の歴史作用を歪曲したものである。》

と、姚が前言でのべた李自成像を否定する。しかし、その論旨がきわめて杜撰なものであることは、「學術研究」同期にのせられた黄彦の「試みに李自成の思想を論ず」の一文に對する討論」によつて、完膚なきまでに批判されている。

以上は、たまたま私の目にふれたものを紹介したまでだが、中國全體では、おそらく各省各地で、それぞれ異なつたかたちで、より大きく姚に對する反論を展開しているだろう。ここで明らかなのは、姚雪垠の立場、つまりイデオロギーを離れて科學的に歴史を理解しようとする、常識的ともいえる立場が、いまの中國ではまだ完全には許されていないということである。姚の李自成が、階級的イデオロギーのとりこになっている「歴史學者」たちにとつてがまんならぬものであることは、かれらのヒステリックな對應によつて明らかである。このような思想風土のなかで生活する姚にとって、かれ自身の歴史觀を犠牲にして、現代中國の世界を作品にとり入れることは、むしろ當然だつたらう。

ここで、一九七五年十月ごろ、四人組に「李自成」第二卷の出版を妨害されていた姚が、毛澤東に援助をたのんだ手紙を、さきにもひいたけれども、もう一度ひいてみよう。

《黨の文學事業のためわずかの力でも餘分に出し、プロレタリア階級獨裁の利益のため歴史的題材というこの文學陣地を占領し、五四新文學運動以來の歴史小説の空白を埋めようとするために、私はたえず努力して追求し、生命の終わるまで

やるつもりです。(第一巻・前言)

ここでのべられている「黨」とは、かれをずっと翻弄し、痛めつけてきた中國共產黨であり、この手紙をさし出した相手は、その「黨」を指導し、みずから毛澤東文藝路線のイデオロギーをふりかざし、かれの作家生活を破綻すれにまで追いこんだ毛澤東その人である。こういう一節を読むと、中國で作家として生きることの絶望的な困難を感じる。そして、この決意表明は、小説のなかでは、李自成の過度の神聖化、現代化となつてあらわれた。その行きつくきは、けっきょく四人組のとなえた「三突出」などの理論にもとづく單純きわまりない英雄史觀だろう。それは、毛澤東文藝路線が本來はらんでいる志向に應ずるものである。

しかし、この路線の破綻は、現在の中國においてすでに明らかである。四人組打倒のち、中國文藝界では、四人組のとなえた「三突出」「文藝暗黒路線獨裁」論などすべての理論が批判され、それらは「陰謀文藝」としてかたづけられた。しかし、ただ單に四人組時代だけに問題があつたのではない。それを最もよく知るのは、姚雪垠自身である。そして、かれはすでにそれを告發しはじめている。さきにもひいた「歴史の經驗を漫談する」において、屈原、司馬遷、杜甫などの文學が、皇帝を頂點とするその時代の政治イデオロギーとどのように關わつてきたかを、自らの生きてきた毛澤東を頂點とする苛酷な政治狀況との對比をうちに潜めつつのべたのちに、かれはいう、

「たとえ文化大革命前の十七年においても、われわれはひじょうに深刻な正反兩方面の經驗——われわれが客觀的な、嚴肅な態度で科學的な總括を行なうに値いする——を持った。もちろんわれわれは文化大革命前の十七年中の文學創作が成績あるものであり、かつて少なからぬよい作品を出版したことを肯定すべきである。しかし、わが國は九億の人口と三千年あまりの文學史をもつ偉大な國家であり、このわずかの成績は實のところわれわれの國家とあまりにもそぐわないことをも考へてみるべきである。文化大革命前の十七年においては、全體の方向からいえば、かならず一本の紅い路線が十七年をつらぬいていることを肯定すべきだが、しかしなにがしかの時、なにがしかの方面、なにがしかの具體的問題では、

無理解、あるいは官僚主義的指導、およびある人の自己主張によって、むりやり「理は直に氣は壯に」文化や文學事業を繁榮させる客觀的法則を破壊し、われわれこの世代の人間に歴史に對してひじょうに苦痛な代價をはらわせたのである。

この法則とは何か。簡単にいえば、すなわち毛澤東同志の提出した「百花齊放」と「百家爭鳴」である。本質からいえば、つまり社會主義的民主精神と科學精神でもあり、さらに民主生活を保護する制度と法律もある。』

「文化大革命前の十七年」とは、人民共和國成立以來、文革勃發までの時期である。現在の中國では、四人組がこの時期の文藝を「文藝暗黒路線獨裁」の文藝として徹底的に抹殺したことへの反撥から、この十七年の文藝を、毛澤東自身が主導してきたということを根據にして、無批判的に肯定する論調が盛んである。しかし、姚のこの一節は、十七年閒毛自身が主導してきた文藝路線に對する、まっとうな異議申立てといえよう。さきの「前言」では「毛主席」とよんでいたのが、ここでは「毛澤東同志」となっているのに注意すべきである。そしてその異議のいきつくきは、五七年の大鳴大放のときと全く同様に、やはり「百花齊放・百家爭鳴」のよびかけなのである。この意味するところは、きわめて深いといわなければならない。

しかし、ともかくも、毛澤東文藝路線に對する異議が、間接的にはあれ許される時代が、やってきた。そして、「思いきって迷信を打破し、個人崇拜を放棄し、二度と偶像をつくらないようにしよう」とかれ自身よびかけているように、「李自成」においても、宮廷部分にみられる、かれの知識人として作家としての資質により忠實な、事實を重視したよりリアリティを持った敘述が、これからはいっそうきわだててくるだろう。それを示すかのように、第三卷の一部をなす「燕遼紀事」は、清朝の皇太極をきわめて客觀的肯定的にえがき、異民族の侵略者といったぐいの偏見は全く感ぜられない。そして清の風俗の描寫は、これまで以上に歴史上の事實に接近していると思う。

ともかく、知識人作家としての自己に忠實な、歴史科學による事實重視の方向と、民衆への奉仕、ひいては共產黨による階級的イデオロギーにもとづいたフィクション重視の方向と、「李自成」内部におけるこの相反する二つの方向のバランスは、この新しい中國の狀況のなかで、どう變化していくのだろうか。それこそは、作家姚雪垠の閉ざされた内面をもっともなまな

ましく示すことになろう。それを自分で檢證してみようと思いつつ、第三卷の一日でも早い出版を、私は待ち望んでいる。

(一九七九・三・二八)

〔補記1〕 中國の歴史小説が荒唐無稽なおはなし、イデオロギーの代替物から、歴史的事實そのものを追求する方向に變化してきたことについては、最近出版された蔡東藩の「前漢演義」上海文化出版社、一九七九年六月、につけられた吳澤の解説「蔡東藩と「中國歷代通俗演義」」が参考になる。蔡東藩、名は鄺、字は椿壽、浙江省蕭山臨浦鎮の人で、一八七七年(清の光緒三年)に生まれ、一九四五年に卒した。辛亥革命の後まもなく、

かれは郷里で上海の會文堂書局のために、「中國歷代通俗演義」をかきはじめ、一九一六年に「清史通俗演義」を世に問うてより、つづいて元史、明史、民國、宋史、唐史、五代史、南北史、兩晉、前漢の通俗演義をかいた。一九二六年九月になってやっと最後の「後漢演義」をかきおえた。蔡東藩のこの書は、秦の始皇帝からかきおこし、一九二〇年までずっとかいてきて、みなで二千百六十六年の歴史をかいてある。姚の「李自成」も、とくに「明史」「清史」の通俗演義は参照したにちがいない。さて、吳澤はそれまでの「演義」と比較したうえで、この書の性格を規定する。

『中國歷代通俗演義』はワン・セットの體例特殊で、自批自注をつけた演義の巨著であり、蔡東藩の演義觀點と歴史觀點を突出的に反映している。羅貫中の「三國演義」と馮夢龍、蔡元放の「東周列國志」はもともと二種類の傾向をはっきり異にした代表性をもった演義作品である。羅貫中は歴史に出入りし、多くの宋元以來の話本と民間に傳わる故事や傳説を融合して、いわゆる「七分の事實、三分の虛構」だが、しかるに馮夢龍は一事として來歴無きは無しとなえ、「臨潼に寶を鬪う」「鞭もて展雄を伏す」の類の史書に根據のないはなしを演義の林から逐い出そうとした。蔡東藩は折中の方法を採用した。かれは考えた、文と史とは途を殊にするが、しかし演義小説は必ず正史を原則とすべきで、フィクションが史實を歪曲することはできないと。』

姚雪垠「李自成」の構造

以上の論斷を、「唐史通俗演義」「宋史通俗演義」の自序をひいて論證したうえで、吳澤はさらにいう。

『かれは歴史演義をかくうえでたとえ稗官の軼聞を採用した時でも、必ずらず旁證のある者でなければだめだと考えた。かれは「明史通俗演義」の自序のなかでやはりいう、「夫の燕詞野説の、正史に列せざるが若き、其の旁證す可き有る者は則ち概ね之を存し、其の旁證す可き無くして大いに荒唐に渉る者は、則ち務めて略に従い、或いは斷語を下して以て之を明らかにす。文は虛を尙ばず、語は惟だ俗を以てす、蓋し猶お是れ元清兩演義の故例也。』

このあたりの記述は、姚雪垠が「前言」での上べている「歴史への深入」に對する、歴史小説の先輩による解説となろう。そして、「李自成」で私が指摘しておいたように、歴史深入、事實重視をつきつめた必然の結果として作者自身が注をつけるということ、すでに蔡東藩もやっていたのである。さきに引用した部分にすでに「自批自注」「斷語を下して云云」とあるが、また吳澤をひくことにする。

『又たとえば、「後漢演義」八十二回、劉備が諸葛亮にたのみこみ、關羽、張飛といっしょに新野につくと、徐庶が迎え入れ、友人どうし顔をあわせたところまでかいてきて、注していわく、「徐庶が馬を走らせて諸葛を薦むるは、羅氏の「演義」自り出ず、「蜀志」諸葛傳中を按ずるに、庶は尙お新野に留まり、未まだ曾つて操に詣らず、今は之に従う。」八十四回で徐庶が劉備を辭し曹操に歸するところまでかいてきて、また注していわく、「三國志・諸葛亮傳」に詳しく此の事を載するが、庶の曹操に歸するは、繫して備が當陽に敗るの後に在り、且つ庶の母も亦た自殺するを聞かず、羅氏の「演義」と同じからず。』

以上みてきたように、蔡東藩の「中國歷代通俗演義」における事實重視

の方向は、まさしく「李自成」の宮廷生活を叙述した部分と重なりあうものである。そして、ここで重要なことは、その「唐史通俗演義」の自序で「正史を以て經と爲し、務めて確鑿を求め、軼聞を以て緯と爲し、虛誣を尙ばず」というごとく、蔡の「演義」が事實重視、より合理性を求めるといふ方向で終始一貫していたことである。蔡にとって、姚雪垠が「李自成」の農民軍部分の叙述でみせた、事實をねじまげてでもフィクションを導入するといったやりかたは、およそ理解できなかったにちがいない。少なくともかれのもつ「歴史小説」の理論からすれば。

また、「人民文學」一九七九年第一期にのった茅盾の「思想を解放し、文藝民主を發揚しよう——中國文學藝術工作者第四次代表大會および中國作家協會第三次會員代表大會での講話」で、かれは外國文學からもよいものをまなぶべきだとのべて、いう、

《歴史小説をかくうえではやはりスコットや大デューマの歴史小説の中からいくらか技巧を學んでよからう、この二人の歴史小説家が歴史の眞實によらずして虚構ないし臆造がかなり多いということは、取る必要はないけれども。歴史小説は虚構された人や事を許容するが、しかし必ずその歴史時期に發生しうべき人や事でなければならぬ。さもないと、つまり壁に向かつてかかってにデッチあげるといふことになる。》

この發言からみると、茅盾の歴史小説觀も、フィクションを拒否して歴史事實にもとづいた合理性を追求することにあるのは、明らかである。かれが「李自成」のなかでも歴史深入の精華たる「宮廷内部闘争」を絶賛したのは、當然だったといえよう。

〔補記2〕最近、香港から「中國文學家辭典」（現代第一分冊）文化資料出版社、一九七九年七月、なる書物が出版された。どうみても大陸もののリプリントだが、「辭典」そのものは、「現代部分」として「五四からはじまって、現在にいたる」文學各領域の作家を網羅し、從來知られなかった新事實を豊富にとりこんでいて、きわめて役に立つ。これは「第一分冊」だが、全部で四百五人を收録している。この「辭典」の姚雪垠の條には、かれの経歴について、新事實をのべた部分や、從來知られていたのと

異なる事實をのべた部分がある。そこで、以下に論文の記述とほぼ一致する部分を除いて、あけておく。

《著名作家。一九一〇年生まれ。河南鄧縣の人。小さい時は家が貧しかったのでただ小学校で三年と初級中學で一學期未滿べんきょうしただけである。一九二九年開封にいつて河南大學予科に合格し、のちに大學闘争に参加して逮捕され、出獄後は學校から除籍された。刻苦自學によりつつ、創作の道をあゆみだした。かれは青年時代かつて歴史學者になりたいと望んだことがあり、中國歴史と中國古典文學にたいして廣泛な知識と素養を積んでいて、かれが中年以後歴史小説の創作に盡力するうえで堅實な基礎をうちかためたのである。一九三八年春、短篇小説「車半臺分以下の麥わら」を發表し、新鮮で生き生きした民衆のことばを運用して、わりあい成功裡にひとりの農民遊撃隊員の典型形象をつくりあげ、讀者と文藝界の重視をうけた。そのうち重慶にやってきて、中華全國文藝界抗敵協會理事にえらばれ、かつ創作研究部副部長を擔當した。抗戦後期は東北大學（四川省三臺縣にあり）副教授に任ぜられた。抗戦勝利ののちはかつて上海大夏大學教授に任ぜられたことがある。この時期にかれは「牛全德と紅だいこん」（一九四二年）、「春暖かに花咲くころ」（一九四四年）、「從軍中の戀」（一九四六年）、「長夜」などの中長篇小説およびその他の作品を出版した。「長夜」は故郷の氣分が充滿した作品であり、廣びろした農村階級闘争の背景のうえに、きめ細かく二十年代の河南「土匪」の生活を描き、農村の破壊によって自發的に闘争の道をあゆみだした一群の農民の形象を浮きぼりにした。そのほかに中篇傳記文學「盧燦軒を記す」を出版した。一九五一年には河南省文聯にいき專業の創作に従事した。一九五三年には武漢の作家協會に移った。一九五七年には歴史小説「李自成」の創作を開始し、計畫では全五卷、すべて約三百萬字となる。はやくも抗日戦争時期に、かれは長篇歴史小説をかきたいとおもっていたが、しかし解放後になってやっとこの願望は實現できた。……一九七八年二月姚雪垠は第五回全國政協委員、湖北省文聯主席にえらばれた。》